



はじめに

大坂城にかかわる調査研究がすすみ、多くの「謎？」が解き明かされてきましたが、まだまだ解っていないこともあります。深北緑地にある残念石もそのひとつです。



謎を解く鍵は、石のひとつに入っていた

京極家の

刻印

でした。

『刻印』が何を物語ったのか？
絵図をもとに解説していきます。



京極文書が明らかになった！ 土木工事のあらすじ

徳川再興期の調査研究において、工事関係史料としておおいに役立つとされた『京極文書』という古文書【過去の時代の史料となる古い文書】があります。【築城の際の土木工事】に参加した大名家の若狭京極家（以下、京極家と称する）のもので、その中の内訳には、

『京極文書』には何が？

- 一、飯盛山からの石材運賃
- 一、大坂城の西方農人橋にある渡止場から運送場までの運賃（牛車の代銀）（代金）
- 一、飯盛山からの船産の水主「船乗り」の口用賃
- 一、石船の新造および修理の代
- 一、石場肝煎（世話や管理・監督）の舟へ運わす銀
- 一、農人橋渡止場お家屋敷の買賃および天満屋敷町格の口用
- 一、石事買物の御用、徒歩衆に貸し与えた銀多公儀・割符（公的な為替手形）出銀、万樹材木の代
- 一、大石、栗石の運送場の地子銀（借地代金）

石運びに実際にかかる費用が列挙されていました。これは、まぎれもなく、生駒山地飯盛山から石を切り出して大坂城まで運んでいたことを示しています。

つまり

京極家の刻印が入った石が出てきたということ、京極文書の内容が事実であることを証明する『証拠の品』が出てきた、というわけです。

生駒山地の石切丁場の様子を明らかにしました。



京極文書が明らかになった！ 生駒山地の石切丁場

実際に山から大きな石を切り出し、どうやって大坂城へ運んだのでしょうか？

生駒山地の石切丁場について

豊臣築城期も徳川再興期もほぼ同様と思われる。西側のふもとにあるいくつもの谷筋ごと採石が行われていたようです。実際に石切丁場で残念石が確認された地は、北から飯盛山北東部斜面、龍間村、善根寺村、日下村、豊浦村です。

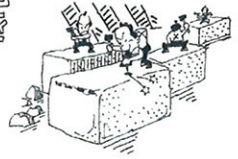


「石を切り出す」って どんな作業？

絵図は徳川再興期を表しています。規格寸法に合わせてどうふ型に切り、刻印（石を彫る）が入っています。



大きな玉石に穴を等間隔で線上にあげ、石を裂くように割る。



大割りから小割りにする。くさびを使って形を整えながら割る。

ちなみに、豊臣築城期の特徴は、大きさはだいたい五十センチ前後、「野面石」といって丸くてゴロンとしており、刻印は入っていません。



どうやって石を 大坂城まで運んだの？

まず、谷川にせきを築いて水をため3〜5トンもある石を「いかだ」などに浮かべ、せきを切って一気に川下へ流すこれを繰り返しながら運んだのではないかと考えられています。ふもとから深野池まで引き下ろせばあとは深野池から「石舟」にのせて下れば船着場のある京橋にたどりつきます。古くからある大和川流域を結ぶ「水的路」を利用していました。

すなわち！

大坂城へはたいへん便利な水運ルートを使って最短距離で運ぶことができた！

深野池が水運ルートのスタート地点であった！

ということも示しています。

あてがき

現在、私たちは、都市化された便利な生活を送っており、すぐ足もとの河内平野か海や干潟、湖があったことを忘れてしまっています。そして、その湖も、現在は深北緑地にある「深野池」を残すのみとなりました。私たち公園のおじさんは、私たちの置業、地域が知らない、地域が忘れつつある歴史文化の記憶を後世に伝えていきたいと思っています。

【引用・参考文献】大坂城跡調査関係史料、大坂市史第71号、大坂市史編纂委員会、江戸時代（一）政問史、大坂市史、四史、日本学振友の会、藤井重夫、摂津六次郎（上）、生駒山地の石切丁場について（一）城と歴史、一五〇号、日本学振友の会、本島文、生駒山地の石切丁場（ヒストリア大坂再興と東六甲の石切丁場）、別冊、大坂城跡研究会、中村道司、大坂城跡の築城と昔ながらの石切丁場（ヒストリア大坂再興と東六甲の石切丁場）、別冊、大坂城跡研究会